

# 吉田芝溪

寛延3年(1750年)-文化8年(1811年)

芝溪は、寛延3年(1750)に渋川村(中之町)の農業と系繭商を営む吉田甚兵衛の長男として生まれました。芝溪というのは号であり、諱は友直、字は子正、通称は宇助、襲名して甚兵衛を名乗りました。芝中(現御蔭地区)で開塾に当たったので、「芝中の先生」や「新田の先生」とも呼ばれていました。

芝溪の父は優れた学者に子どもたちを学ばせるため、芝溪が16歳の時に、弟の翠屏とともに北牧宿(現渋川市北牧)の学者山崎石燕の下で儒学を学ばせました。芝溪の学問に対する姿勢はとても真摯で、毎夜必ず『史記』を1巻読まなければ寝なかったほどと言います。

安永元年、父の死去に伴い家業の農業と系繭商を継ぎましたが、当時の系繭商仲間が悪い習わしで不正な秤を平気で使っていることを快く思わず、正義感の強さから矯正に努めましたが効果がなく、父の七回忌を機会に系繭商を辞め、水油商とたばこ商に転じました。

しかし、商いの傍ら学問に対する思いも断ちがたく、安永5年(1776)、27歳の頃に江戸へ出て、昌平黌の聴講生になりました。そこで儒学者井上金峨の講義を聴き、金峨がどのような質問にも即座に答え、大変博学であることに驚き、自分の至らなさを痛感したことから、その後、当時一流の学者とも交流を深めるようになりました。

昌平黌の学頭を務めた平沢旭山が天明5年(1785)に渋川に来遊した際、芝溪宅に3年あまり滞在しました。この間に旭山から、儒

## 吉田芝溪の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1750	寛延3	1	上野国群馬郡渋川村(現渋川市渋川(中之町))に生まれる
1760	宝暦10	11	弟「翠屏」が生まれる
1765	明和2	16	北牧宿(現渋川市北牧)の儒学者山崎石燕に弟の翠屏らとともに学ぶ
1770	明和7	21	渋川村を千ばつが襲う
1772	安永元	23	父甚兵衛が49歳で没する 家業の農業と系繭商を継ぐ
1776	安永5	27	この頃、昌平黌の聴講生となり、儒学者(折衷学派)井上金峨の講義を聴く
1778	安永7	29	妻をめとる
1780	安永9	31	系繭商を辞め、農業のほか水油商・たばこ商をする
1784	天明4	35	弟翠屏の子「大二郎」(のちの養子)が誕生する
1785	天明5	36	昌平黌の学頭を務めた平沢旭山が渋川に来た際、芝溪宅に3年あまり滞在する このとき、儒学、詩文、国学のほか、農業経済、養蚕、馬産や開塾などを学ぶ 領主の小笠原氏へ上书する 山崎石燕が没し、芝溪ら門弟が遺骨を引き取り雙林寺(現渋川市中郷)に葬る
1787	天明7	38	この頃周休竹溪が芝溪や翠屏に文書学などを学ぶ 芝中の開発に着手する
1789	寛政元	40	養蚕は科学的に行うことが大切であると記述した『養蚕須知』を著す 領主の小笠原氏に、翠屏らと連名で芝中の荒れた畑の再開発を願い出る 漢文体の小説『浴泉奇縁』を著す
1792	寛政4	43	幕府評定所へ箱訴(目安箱)を行い、領主の小笠原氏からとがめられる
1793	寛政5	44	弟の翠屏や小作人3人と芝中に移住する この頃から本格的に門弟の育成に当たる

学・国学・詩文から農家経営、養蚕、産馬や開墾まで学びました。

明和7・8年(1787・1788)に渋川村を襲った干ばつと天明の飢饉を経験し、その教訓を生かして芝中の開拓に取り組むこととしました。寛政5年(1793)、弟とともに芝中に移住し山林を開墾して畑を作り、周囲に桑の苗木を植えて(あぜ桑)養蚕の普及を促し、このことが芝溪の暮らしを支えました。また、この頃、開墾・米作・養蚕の傍ら私塾を開いて門弟の教育にも本格的に取り組み始めました。芝溪、翠屏の兄弟は同じ志で門弟を率いただけではなく、自ら先頭に立って学び、行い、その学徳は遠くの村にも及び、野良犬村(現前橋市)や金古村(現高崎市)から夜道を通い、教を請いに来る者があったほどでした。2人の下には有能な弟子が集まり、門弟の中には木暮足翁、周休竹溪など、後の渋川の教育・文化に影響を及ぼす学者も生まれました。

芝溪が実践したのは、進んで新しい学問知識に取り組み、現実の生活や社会に役立つことを重んじた実学でした。この郷土に根ざした特色ある学問は後年「渋川郷学」と名付けられ、芝溪は「渋川郷学の祖」と位置づけられるようになりました。

芝溪は実際に自分が体験した養蚕と農業の知識を活かし、『養蚕須知』『開荒須知』などの農業指導書を著しました。「須知」とは「知らなければならないこと」という意味で、どのような農民でも読めるようにと、序文以外はすべて仮名入りの文書にし、難しい漢字にはふり仮名もつけるという周到ぶりでした。自身の経験に基づいて書かれたこれらの書物は説得力のある記述であり、昭和に入ってから復刻され活用されるほどでした。

多くの門弟や農民に慕われた芝溪は文化8年(1811)、芝中で没しました。享年62歳。墓所は渋川市渋川(御蔭)に2か所あり、ともに群馬県指定史跡となっています。

西暦	和暦	年齢	できごと
1795	寛政7	46	荒れ地の開墾は農業振興に最適であることを記述した『開荒須知』の原稿ができる
1796	寛政8	47	この頃から南横町の木暮足翁が芝溪・翠屏兄弟に漢詩文を学ぶ
	寛政年間		子弟に孔子の教えの正しさを理解させようとした『辨学寮東家』を著す
1805	文化2	56	弟の翠屏が46歳で死去 法名「寒巖道林居士」 水戸藩主へ提出のため『開荒須知』を再編する 水戸藩主に召され、木暮足翁を同伴して水戸へ赴き『開荒須知』『養蚕須知』を献上する
1806	文化3	57	養子の大二郎(弟の翠屏の子)が妻子を残し死去
1810	文化7	61	現前橋市総社町の二子山古墳など4古墳を実地踏査したうえで記述した『上毛上野古墳記』を著す
1811	文化8	62	6月19日 痢を病んで芝中にて62歳の生涯を閉じる 法名『傑叟復英居士』

\*年齢は数え年とした



【御蔭にある芝溪の墓】



【藍園が建てた芝溪の墓への道標】

# 吉田芝溪の著作

## 多くの著作を残す芝溪

吉田芝溪は文章の才能豊かで複数のジャンルにわたって著作を残しています。富岡地方に講義のため招かれた際も「私は文章が得意なので招かれた」と自分でも話すほどの文章上手です。現代に伝わっている著作を紹介します。

## 作品集

『芝溪文稿』 丙・丁・戊・庚の4冊が伝わり54編の旅行記・感想文・門弟に与える書など収録されている。甲乙については所在不明。

## 思想書

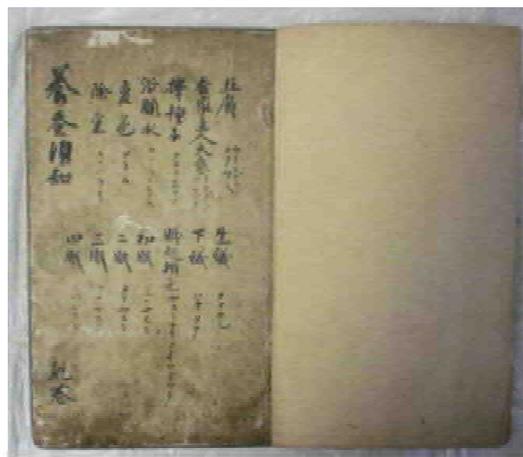
『勉学遼東豕』 表題は、中国の故事を引用した、自分の儒学の見識は狭いものだと弁えていますという、謙遜した意味の題名。子弟に孔子の教えの正しさを理解させようとしたもの。特に当時の官学である朱子学を批判している。

## 実用書

『養蚕須知』 芝溪が寛政元年（1789）に著した農業指導書。その後芝溪自身が改訂したことも考えられる。平沢旭山の指導と、養蚕農家でもあった芝溪が実際の経験を基に著したと言われる。原本は「乾」「坤」の2巻構成。誰でも読めるようにと平易な言葉で書かれている。

『開荒須知』 芝溪が寛政7年（1795）に成稿した農業指導書で「日本能書全集3」にも収録されている。「開荒」とは「荒地を再び開墾する」という意味で、「開墾のすすめ」ともいえる本である。乾・坤の2巻からなる。

『救荒須知』 芝溪の著した農業書と伝わっているが、残念なことに「救荒須知」は現存していないため、その内容の詳細は分からない。



【「養蚕須知」原本 後藤善郎氏所蔵】

## 古墳関係

『上毛上野古墓記』 現在の前橋市総社町植野にある4つの古墳の被葬者を、『日本書紀』の記事を引用して、豊城入彦命、彦狭島王、御諸別王などと推定している。皇族の陵の荒廃ぶりを嘆いている。

## 小説

『浴泉奇縁』 長岡（現・新潟県長岡市）の女性が事情があって伊香保温泉に流れ着き、そこで知り合った2人の客との間の出来事を綴った、漢文で書かれた小説。

# 吉田芝溪に影響を与えた 山崎石燕

宝永6年(1709年)-天明5年(1785年)

山崎石燕は、北牧宿(現渋川市北牧)で問屋を営む山崎八郎左衛門の分家、重郎左衛門の二男として生まれました。石燕(ほかに君山、吾川、臥雲亭)と言うのは号であり、通称は源蔵、諱は興虎、字は子虎と言いました。

幼い頃から学門を好み、下仁田村の高橋道齋に国学を、後に江戸に出て井上金峨に儒学を学びました。帰郷後は地元で塾を開き、基礎的な学問を教えるなど子弟の育成に尽力しました。その中には吉田芝溪・翠屏兄弟もおり、芝溪のその後の学問の歩みに影響を与えました。その学風は、実業や生活に結びついた実学を重んじたもので、現実の生活や社会に役立つものでした。

石燕は江戸で儒学を学ぶ傍ら狩野派の絵師とも交流をもって絵画を学び、人物画を得意としました。気品高く描かれる石燕の絵は郷里の人々にも評判が高く、請われるままに描いたであろうたくさんの画軸や屏風絵が、現在でも市内に数多く残っています。

天明3年、石燕が75歳のとき浅間山が大噴火を起こしました。その被害は北牧宿にも及び、石燕の家も泥流に流されてしまいます。このときの様子が『浅間山大変実記』という書物に「爰に牧の石燕先生と云篤実の君子有りけるが…此先生、七月七日数々書物を干されけるが、座敷へはいなる故、そこそこにかたづけ置けるに、八月の大変、家屋敷の跡形もなく流失して、只腹中の書のみ残されしは扱々おしき事ども也」と書き記されています。こうして家を失った石燕は江戸へ出て、塾(臥雲亭)を開きました。

著書として、中国の聖賢の道を説いた『蒙求解』や、人生観を述べた『独語』などがあります。

天明5年、江戸で77歳の生涯を閉じた石燕の葬儀は、吉田芝溪ら門弟により盛大に行われました。墓は渋川市中郷にある雙林寺に建てられ、市指定史跡となっています。



【市指定史跡 山崎石燕墓所 雙林寺境内】